



人と人、 ひとつつながりの CSR

代表取締役社長

系井 辰夫

小さなつながりを大切に

2015年の年頭に、当社は連鎖～「創造と挑戦の実現」の年と位置付けて「連鎖＝つながり」をキーワードに掲げました。お客さまの期待に応えるため、創造と挑戦を繰り返し、それを実現に結びつけ、自動車を中心に輸送する内航海運業では、トップシェアラーという現在の姿を築きあげてきました。その姿を未来へつなげていきたいという思いを込めました。物流とはまさに人とモノをつなげる仕事そのものです。

私自身のことを少しお話ししますと営業畑が長いのですが、その時に「人のつながり」の大切さをよく実感しました。営業の仕事は何度も足を運ばないと仕事にはつながっていかないものです。最初は何事も小さなきっかけから

始まります。お客さまの期待に応えることでお互いの信頼が積み上がって、やがて大きな仕事に結びつくことは多々ありました。だから、どんな些細なきっかけも決してないがしろにはできないのです。そうやって皆が考え努力してきたからこそ、お客さまから信頼されるようになったのではないのでしょうか。お客さまの要望に応えることが事業を通じた社会貢献です。これからのその思いを未来へつなげていかなければなりません。



『和』の精神を広く生かす

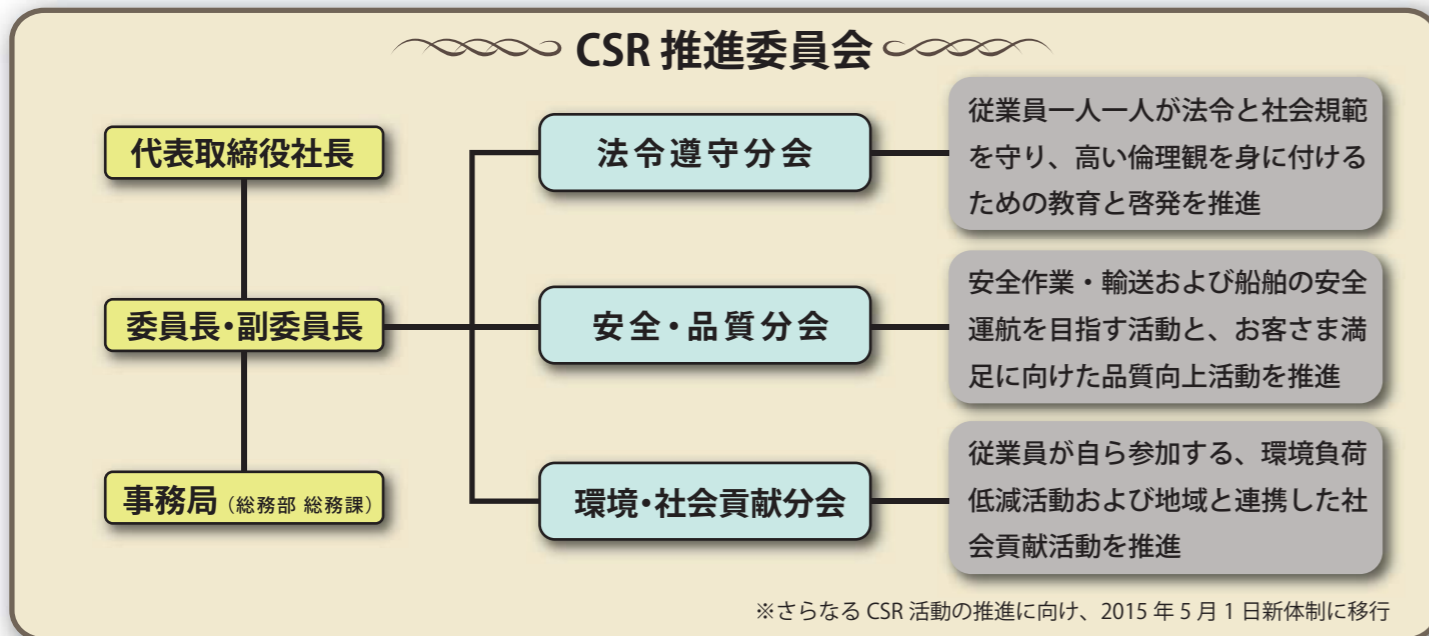
「働く」と言えば、その語源は「傍(はた)を楽にする」という説があります。「はた」は身のまわりであり、関係する人や社会でしょう。まわりの人々に気をくばり、役に立ちたいという思いを、私たち日本人は大事にしてきたのではないのでしょうか。これは、まさに当社の社是である『和』の精神です。ところが私が外国で仕事をしていた時、欧米は基本が短期商売ですから従業員たちは「こんな儲からない仕事をなんで続けるんだ」と言うわけです。金銭以外のメリッ

トも多々あるのだから、辛抱強く関係を育んでいこうなどという考え方は、なかなか理解されませんでした。では、果たして私たちは間違っていたのでしょうか。今、当社は海外においても事業を拡大していますが、幸いにして海外のパートナー企業からは大変高い評価をいただいています。これは駐在員をはじめ関係する皆さんが、CSRに通じる『和』の精神を受け継ぎ、まわりへの気くばりや役に立ちたいという思いでお客さまと接しているからだと思えます。

DNAがCSR

今回のCSRレポートでは阪神・淡路大震災を回顧していますが、あの時の災害救助の経験が、先の東日本大震災の救援活動にもさまざまな形で生かされました。東日本大震災に見舞われた2011(平成23)年は、CSRを実践する基本方針『和』でつなぐ人と社会」を策定した年でもあります。震災からの復旧は、まさに「人のつながり」の大切さをあらためて私たちに問いかけていると思えます。

当社は伊勢湾台風(1959年)に際して全社を挙げて復旧活動に尽力したことが、社会の信頼を得て発展する契機になりました。社会貢献が事業の基本にあると考えれば、当社は「DNAがCSR」と言っているのかもしれませんが、何か特別なことではなく、日常的に、ごく当たり前のこととして「CSR」を実践していければと思っています。



くるまざ 輪になって語ろう「輪座」

「輪座」は、袴を脱いで社長と従業員が自由に語り、心をつなぐ昼のひとときです。日頃の思いや、これからの仕事などオン・オフ問わず話し合いました。

